とわたり

第 17 号
平成 13年12月31日
発行所
登渡神社社務所内
登渡会編集室
電話043(242)3403

平成13年例祭

西千葉 総鎮守 登渡神社略記

鎮座地　千葉市中央区登戸二一二一八
神社名　登渡神社（通称登戸神社）
御祭神　天御中主神　高皇産霊神
　　神皇産霊神　天日鷲神

御神徳＝天御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神の三柱の神様は造化三神と称えられ宇宙の初めの時お生まれになられこの世の中のあらゆるものを初めてお造りになられたという御偉業から、災いを除き、人を苦しみから救い、あらゆるものを生み育て、お守りして下さる霊験あらたかな神様であらせらる。

御由緒＝当神社は正保元年（一六四四）九月五日、千葉家の遺族、登戸権介平定胤が祖先を供養するため千葉妙見寺（現在の千葉神社）の末寺として妙見大菩薩を奉斉し、僧定弁に守護させたのがそのはじめと伝えられ、その後、慶応三年（一八六七）に登渡神社と改め御祭神を天御中主神以下の造化三神に定め、明治四十一年に登戸字鷲塚鎮座、鷲神社を合祀し、現在は四柱の神様がまつられております。

御社殿＝本殿は総欅造り、銅板瓦葺屋根、奥行四間、間口四間の伽藍構造で嘉永三年（一八五〇）六月、信徒の浄財五百両をもって、葛飾郡八木村の棟梁紋次郎の施工により完成、また諸彫刻は、信州上諏訪の立川内匠正の作になるものでその精巧壮麗さの故に、昭和四十三年千葉市文化財に指定さる。平成二年（一九九〇）の大造営で本殿を現在の場所へ移築し、新たに鎌倉時代の建築様式に準じ、桧造り、間口六間、奥行三間の入母屋造銅板一文字葺の拝殿。前面を間口二間の流れ向拝とし、後方に間口五間、奥行二間半の切妻屋根の幣殿、神饌所、祭器庫を設け、幣殿は正面に高欄を廻し、床を桧板張り、天井は格天井鏡板張仕上げとした。

また、神輿庫、大師堂、古札納所新築、その他末社の修理、境内地の整備、植樹等の大事業が、今上陛下御大典という我国歴史上の佳年に成されたことは御神慮は勿論のこと、敬神の念篤き氏子崇敬者の皆様方の御尽力の賜物であると存じます。

稲とまつり

登渡神社宮司
星次百太郎

国土を海に囲まれ、その中央に山脈がある大地――日本列島。

流れる川は河口にいたり肥沃な平野を形成する。南地、弓型に伸びた私達の国土には、亜熱帯から亜寒帯まで、独特な気候と四季の変化に富んだ自然と生存があります。そして、夏の高温多湿な気候条件と豊富な水は、稲作を基盤とする農耕文化を育みました。

水田を遠く取り囲む森、背後の山々。日本の典型的な農村景観。山や川、岬、田圃や畑などの片隅にも神々は祀られています。このような神々の存在は、現在でも日本の至るところで目にすることができます。これまで自然を守る役割を果たしてきたのもこうした神々でした。

山も海も川も水田風景と小さな神々を描き入れれば、一枚のキャンバスの中に、たちまち懐しい「日本」が立ち現れてきます。

――豊葦原瑞穂国の風景――

古来、人々は日本の国土を讃えて「豊葦原瑞穂国」と呼びました。これには生命の源とも言える稲が豊かに稔ることを願った人々の祈りの心が込められているのでしょう。国のはじめ、水田を開き、米を豊かに稔らせることが「国造り」の基本であり、国の繁栄をもたらすものでした。こうした理想を基磐に、米作りの手振りと、豊かな稔りを祈る神祭が日本の文化と日本人らしさを培ってきたのです。

日本の神話や古い歴史を記した「古事記」「日本書紀」によれば、稲をはじめ五穀は、神が生み成されたものと語られています。私達の主食――お米は、天孫ニニギノミコトが、豊葦原中津国と呼ばれていた日本の国土を治めるために、高天原から天降られる時、皇祖天照大御神様からいただいたものと伝えられています。その時、天照大御神様は、皇孫に稲を作り、神祭りを行なうようにおっしゃられたのでした。そして地上に瑞穂国が誕生したのです。

稲は日本のモンスーン的気候風土に最も適した作物であり、優れた穀物として、祭りや正月など、日本人の晴れの日の食物として古くから大切にされてきました。神話にも紹介されているように、長い伝統に培われた稲を作る営みは、単なる農業労働としてではなく、神と共に働く信仰的な営みともいえるものでした。本来、稲作りとは、神話につづられた通り、神から授けられた神聖なる行為なのでした。

四季折々全国各地で繰り広げられる神社の「祭り」もまた、人々の稲作への思いが、祭りという一つの「祈りの形」となって表現されたものに他なりません。

季節ごとに稲の成長を祈り、土地土地の風土や人々の気風を取り込みながら行われる祭り。こうした日本人の暮らしを支えてきた山や川や海の様々な祭り、言い替えれば、神道とは、日本の風土と稲の祭りをもとに、次第に様式が整えられてきた日本人の信仰と言えるでありましょう。

人々は祭りを通して、春の訪れとともに、稲や国土を生み成した神々に、秋の豊作と稲作りに携わる人々の幸福を祈り、また秋の収穫期には、神々の恵みに感謝してきました。祭りは、各地の風土特性や時代の息吹を感じながら今日にいたるまで脈々と行われてきました。そして、その中から「神楽」や「田楽」など神と人とが共に感応しあう様々な神事芸能など「祭りの形」が誕生してきたのです。

皇室の御祖先、天照大御神をお祀りする伊勢神宮でも、四季を通じて稲作りと関係の深いお祭りが数多く行われます。神宮の神々にお供えされるお米は、すべて「斎田」と呼ばれる特別な水田で作られます。こうして作られた稲は、十月の「神嘗祭」で初めて天照大御神に捧げられます。神嘗祭は年に千数百回行われる伊勢神宮の祭りの中でも特に重要なお祭りです。天皇さまは、御親ら皇居吹上御苑の水田でお作りになられた初穂をお供えされます。また、このお祭りには、当神社斎田（所在地・若葉区原町）で作られた初穂も「懸税」として五年前より伊勢神宮へ奉献させていただいております。

今年も秋の稔りに感謝し、来年も良い歳でありますよう御祈念。

迎春

敬宮愛子内親王
御誕生　お慶び
申し上げます

登渡神社
登渡神社氏子会
登渡会

コメ（イセヒカリ）

登渡会会長　須田茂夫

コメは日本人の主食であり五穀（米、麦、粟、豆、稗）の一つとされ御神前に供える品とされている。

登渡神社では、若葉区原町に鎮座し星次宮司が兼務する熊野三社大神と共に、平成九年より神事として熊野三社大神総代本木氏の田圃をお借りし御斎田として、伊勢神宮より譲渡して頂いた「イセヒカリ」の籾種を耕作している。

コメ（米）が出来るまでには、八十八回人の手を携えると、原町の人達は言う。

毎年四月二十九日（緑の日）注連縄を張り水が張られた斎田の畦に祭壇が設けられ「御田植祭」が厳粛に斎行され、御田植えの儀へと、斎田へ一礼し水田へ入り平行に張られた縄に沿い、原町の皆様に指導を頂き苗が手際良く植えられ、水面上行儀良く頭を揃え浅い緑色の苗が美事に植えられる。無事育つ事を皆様が願う。微風に苗が前後左右に頭をなびかす、斎田の畦にて汗ばむ体に心地好い春風を受け、御神酒で乾杯の後、登渡神社総代佐野氏、宮の奥様、熊野三社大神氏子の皆様の手作り料理を頂き盛大な直会へ。

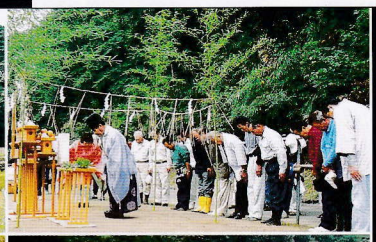
天候、雑草、鳥害、虫害と災害を気遣う日々、稲穂を見守り育て五ヶ月、九月三十日、水面上に少し頭を出していた苗が、今では沢山のコメを付け斎田一面を黄金色一色に染めた畦にて、「抜穂祭」が斎行される。豊作を祝い宮司の祝詞も一段と声高く斎田を渡る。後、「稲穂刈り取りの儀」へ、本年は特に鶴岡千葉市長自ら斎鎌を手に刈り取りをされ、初穂に感激の様子、刈り取られた初穂は早速熊野三社大神の御神前へ奉納される。おだ架けられた初穂に囲まれ豊作を祝い御神酒で乾杯、全員晴れやかな笑顔。帰社し初穂は登渡神社御神前へ奉納される。後に「初穂曳」なる祭事により伊勢神宮に奉納される。

登渡神社では十一月二十三日斎行される秋季例祭の折り、参列者はイセヒカリを譲渡して頂き、神からの授かり品としてありがたく体内へ。神が宿る心となる。

浅い緑の苗から濃い緑の青田、そして実を付けた黄金色の稲穂と、育つにつれて斎田を彩色し色の変化と共に育つコメ、自然の恩恵を受け、神の恵みその物である事に感銘を受け、神と自然に感謝する。

八十八回人の手を携えて実るコメ、収穫を迎えその喜びを感じる事が出来るのも熊野三社大神原町皆様のお陰げと感謝申し上げます。

お田植祭 13・4・29



抜穂祭 13・9・30

登渡〝祭り考〟 XV

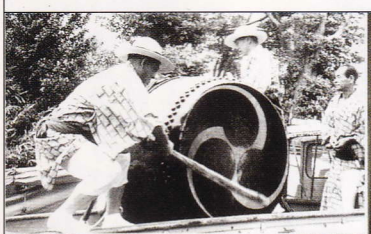
登渡会副会長
西郡饒

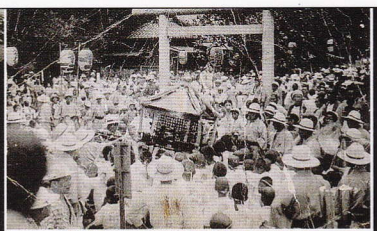
古き良き時代を懐古することが良いかどうかは別として、昔はこうであったということを考えてみたり、それに近づけてみる努力をすることは、歴史を再認識するということでは、あながち意味のないことではないと思う。我々の少年時代までは、海が登渡神社のすぐ下まできていた。今では埋め立てによって見る影も無く、海ははるか一キロ以上も先になってしまっている。従って、登渡神社の神輿が海の中に入るなどということは想像もできない時代になってしまっている。

大原の神輿をはじめとして、今でも神輿が海の中に入る祭は全国各地にあるが、登渡神社の神輿もかつてはそうであった。一昨年、千葉寒川神社の神輿が何十年振りかで海の中に入り、今年で三年連続だという。〝お浜入り〟と称している。

江戸から明治にかけて、登戸は物資の集散拠点としての重要な港でもあり、その遠浅の海はあさりや蛤などの豊かな幸を我々に与えてくれていた。それは昭和三十年代の初めまで続いた。登渡神社には水神様を祀る社があり、現在でも水神様に感謝する〝奉謝祭〟が毎年二月に執り行われている。ここに安置されている神輿はその昔お浜入りをしたという。海がなくなってしまったこの登戸でも、毎年水神様に感謝する祭りが執り行われているのである。それならば、ということで、登渡神社の神輿のお浜入りを復活させようという話が持ち上がっているのは当然のことかも知れない。祭だから神輿が出る、神輿が出るから担ぐ、ということではなく、登渡神社の祭の歴史とか背景とを知ることによってはじめて祭に参加する意味が出てくるのではないだろうか。もっとも、海がなくなった登戸のどこからお浜入りをさせるのかということも大きなポイントにはなるが、神輿の渡御の一つの復活という面では是非実現をさせてみたいものである。葛飾北斎の浮世絵のうち〝富嶽三十六景〟登戸浦を見るたびに、ああだったのではないか、こうだったのではないかと想像をたくましくしている。

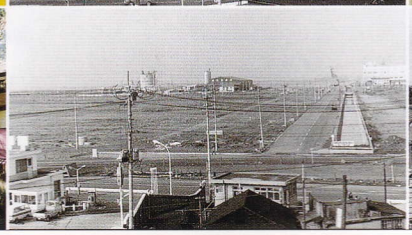
往時のおまつり





節分祭 13・2・3

埋めたて進む登戸海岸
昭和41年頃



例祭 13・9・4.5.6

新聞　1998年（平成10年）9月6日（日曜日）

千葉・美浜区の「浜入り」

子供みこしで"復活"

千葉市美浜区（旧浦安町の一部）潮見地区（はや恒例の）「5月、「子供みこし」が登場した一写真。300年以上の歴史を持つといわれる登戸神社（美浜、登戸神社）の秋祭りで、子供たちのみこしが同町に入るのは初めて。

約40年前、この辺りが埋め立て前だったころは、みこしを担いだまま海たちが海に入る「浜入り」が毎年行われていたが、堤の建てこの風習がなくなり、同町で秋祭りのみこしを担ぐ光景も途絶えていた。

今年7月、同神社宮司の屋敷の大館さん（56）が、幸町潮干狩会員の武井一男さん（54）に「町にみこしを復活させたいから」と声をかけたのが、きっかけで、この「子供みこし」になった。

同町小学校の卒業生を中心に約20人の小・中学生が、みこしを担いで「わっしょい」と練り歩いた。最初よ、恐る恐る一人ひとりみこしの重みに圧倒されていた様子だったが、次第にリズムに乗ってきびきびした動きに。最後はみこしを天高く突き上げ「ワッショイ、ワッショイ」と。

幸町第二小1年の林嘉美さん（13）は「とても面白かったひと楽しかった」と興奮の表情。母親さんは「祭りを通して、子供たちの古里を作りたかった。海の近くに初めて祭りができました」と語っていた。

【取材　岡】

登戸　小唄

村田栄吉・作詞　高梨桂二・作曲

一、千葉の登戸は　明るい街よ　明るい街よ
船の着場と　栄えたむかし　通う千鳥に　アノ夢のせて　折る思いは　サッサ歌おうよ　ソレ踊ろうよ

二、千葉の登戸は　明るい街よ　明るい街よ
澄んだ大気に　心ははれる　睦みかわして　アノ気もひとつ　みんな手をとり　登戸の宮居　希望にもえて　サッサ歌おうよ　ソレ踊ろうよ

三、千葉の登戸は　明るい街よ　明るい街よ
結ぶ心に　笑顔がはずみ　進む文化の　アノさきがけて　はなを咲かそう　登戸の丘に　サッサ歌おうよ　ソレ踊ろうよ

秋祭り　三首

秋祭りの歌三首

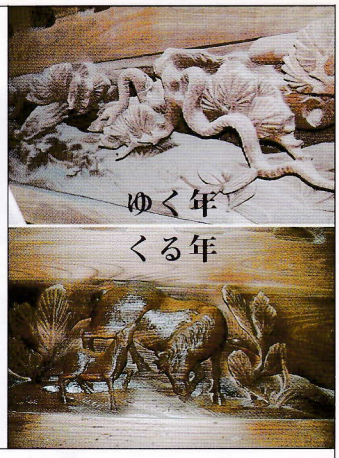
一、宮そうじ　神のこころか　すずしくて　つどいは老の　志気盛んなり

二、年ごとに　くり返すみこしの　み光りは　あまねく照らす　ひとの心を

三、秋風に　幸われいずし　おみこしは　今日と共に　ぶじにおさまりぬ

鈴木宵波

新春を迎え



楽しいおまつり

登戸囃子連会員
小宮淑子

小学校の広報紙の取材で登渡神社を訪れたのは七年程前のことです。宮司さんのお話の中に忘れられない一言がありました。それは「九月五日のお祭りは、登戸の神様のお誕生日なのです。多勢の人に神社に来てもらい皆で誕生日を祝ってもらいたいのです。」という言葉でした。

子供の頃から私にとって年に一度のお祭りは最高に楽しいイベントの一つでした。もらったお小遣いを握りしめ、日に何度もお宮に通ったものです。屋台を一軒一軒くまなく見て回わりやがて日が暮れて家に着くのは夜ですが、この日だけは大目に見てもらえ、しかも食卓にはご馳走が並んでいます。普段会えない従姉妹もやって来て夜遅くまで遊んでいくこともありました。

幼心に最高に楽しかったあの日は実は、お宮の神様の誕生日であり、それを心ゆくまで楽しんでいたことが、神様のお誕生日をお祝いしていたことであったとは—私は、長い間の謎が解けたような何かが懐の奥深い所にスッと落ちたような壮快な気分になりました。

その後おはやしの練習に参加させて頂くことになり、お祭りの舞台に立たせて頂くようになり、神社の神様をより身近に感じるようになりました。太鼓をたたく時はこの土地がいつまでも平和で安全でありますように、自分ばかりでなくこの土地に住む人々が健康で幸福でありますように願っています。

私は身近な所に神社があって本当に幸せだなぁと感じます。私達をいつも見守って下さる神様に日々感謝し、年に一度のお祭りは、盛大にお祝いをしていきたいものですし、私の子供や孫にもお祭りを存分に楽しんでいってもらいたいと願っています。

この町に思う

登戸囃子連会員
小林加代子

平成二年の登渡神社遷座奉祝祭で稚児行列に参加させていただいた思い出がある。幼かった息子は着慣れない衣裳を嫌がり泣いて歩こうとしなかった。言い聞かせてわかる歳でもなく親の私も困り果てているその時、親切な方が泣いている息子に「どうぞ」と飴をくださった。飴を頬張ると泣き止んで、後はなんとか煽てられながら町内を歩き通せ、無事に新しい御社殿の前で記念写真に収まることができたのだった。

——その子が今や中学生。部活と勉強？（まさか！）に明け暮れる日々だが先日、利き腕を骨折し不自由窮まりない。三角布で腕を吊り登校する姿を見て、通学路では地域の方々が声を掛けてくださるそうだ。その場のやりとりを想像してみると、なんとも嬉しい気持ちがしてくる。

幼い頃稚児行列で親切にされた我子が今では登渡神社のお囃子に加わって、数々の貴重な体験をさせていただいているというのも有難いことだ。子どもは親や学校だけでなく、あたたかな地域の方々に支えられ、見守られて育っているのだと感謝している。こんな大切なことが薄れゆきつつあることを危惧する声も多い中で、この町だけは！と誇れる気がするのだ。

登渡会活動報告

平成十三年

1・1 歳旦祭・お囃子奉納
1・3～ 初詣の接待
1・7 参拝者数一九、八五三名
1・15 後片付け
2・1 奉謝祭
3・10～11 水神奉謝祭
3・25 節分祭・お囃子奉納
4・7 総会及び親睦旅行
光町熊野神社参拝と
野栄町望洋荘泊り
4・8 初午祭・お囃子奉納
5・15 第十五回ウォーキング
5・29 行先　皇居東御苑
6・2 千葉市郷土芸能発表会
6・24 お囃子参加
7・15 第十六回ウォーキング
行先　おゆみ野散策
7・20～21 御田植祭、原町御斎田
8・4 春季例祭
例祭に関する会合
9・4 寒川神社神輿渡御
9・5 寒川神社例祭
9・6 例祭準備・本殿・末社
9・9 神輿庫・境内掃除
9・20 夕御饌祭
9・21 例祭神輿渡御
9・26 夕御饌祭演芸助勢
10・6 例祭後片付け・直会
10・7 抜穂祭・原町御斎田
10・9 定例会・会報編集会合
10・30 蘇我比咩神社神輿渡御
11・3 蘇我比咩神社例祭
11・9 第十八回ウォーキング
11・11 登戸小学校区を歩く
11・23 千葉市産業祭り
お囃子参加
12・1 編集会合
12・16 秋季例祭
12・23 お囃子奉納
12・24 三社合同懇親会
（蘇我比咩神社）
1・31 編集会合
定例会
編集会合
迎春準備・本殿・末社
境内掃除・テント設営
大祓式・除夜祭
引き続き初詣奉仕

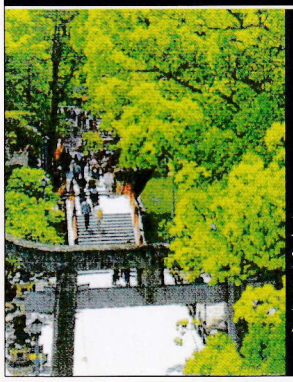
登渡ウォーキング会案内

平成八年に発足した登渡ウォーキング会も毎年加入者が増え今年で九十名を超えました。

ウォーキングはお金をかけずに自然に親しみながら足腰を強化し精神的なストレスも解消させる大きな効果があります。毎回神社の大いちょうの木の下に集り準備運動と安全祈願をしてスタートします。地域の高齢化対策と健康作りの一環として多くの皆様の参加を御願い申し上げます。

尚、登渡ウォーキング会に入会御希望の方は登渡神社社務所まで御連絡下さい。

登渡神社 14年度親睦旅行 14・3・22～24



太宰府天満宮参拝と
九州の旅

登渡神社 13年度親睦旅行
光町熊野神社参拝 13・2・11～12

おやしろシリーズ(16)

「天照皇大神宮（てんしょうこうたいじんぐう）」「登渡神社御璽（とわたりじんじゃみしるし）」のまつり方

登渡神社宮司
星次百太郎

皇太子妃殿下には、平成十三年春、御懐妊の趣を拝し、御安産祈願祭を全国の神社で斎行し、只管新宮さまのご誕生を御祈念申し上げて参りましたが、十二月一日内親王さまが健やかにご誕生の御事。皇室のお慶びは申し上げるまでもなく、国民にとりましても洵に悦ばしく慶祝の至りに堪えません。

各家々でも天照皇大神宮と登渡神社御璽をおまつりし、家族一同でお祝いの誠を捧げましょう

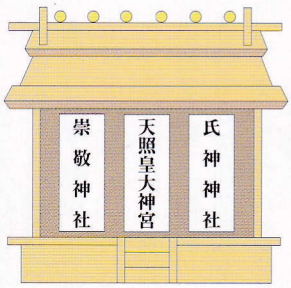
天照皇大御神（あまてらすすめおおみかみ）は、皇室の御祖先神として尊ばれ、また、国民の総氏神と仰がれてます。

登渡神社は西千葉総鎮守として祖先より受け継がれ、多くの方々の崇敬を得ております。

年の初めを迎え、すべてがあらたまるように、神宮大麻（じんぐうたいま）（天照皇大神宮）・登渡神社御璽もまた新しくおまつりしましょう。そして、ご家庭の平安を祈り、朝夕に感謝の誠を捧げることにより、大御神の広大なお蔭をいただき、災いを祓い、希望にみちた明るい一年をお迎えください。

お神礼のまつり方

横に並べてまつる場合



重ねてまつる場合

お神酒のない場合

登渡会会員名簿

(顧)	齊藤　幸男	大場　敏男
(顧)	鉄炮塚正一	小倉　修二
(長)	須田　茂夫	貝沼　正良
(副)	三門　康浩	川村　博章
(副)	西郡　饒	黒田　邦彦
(副)	吉井　広育	小池　良三
(副)	小髙　政義	小宮　武
(会)	渡辺　統道	櫻木英一郎
(会)	小川　恒義	宍倉　健夫
(会)	中村　正夫	高橋　秀行
(会)	植草　毅	田中　速男
(企)	西郡　達男	鶴田　浩雄
(企)	浜田　素直	外山　秀夫
(企)	小川　直樹	西郡　久雄
(広)	古川　増雄	浜田　長平
(広)	染谷　一男	浜田　俊明
(広)	滝口　信孝	原　俊夫
(広)	宮辺　健一	原　俊一
	青木　俊幸	古島　一良
	阿部　和夫	松井　貞
	安藤　信夫	持田　誠
	石出　一三	本木　信夫
	石原　一彦	森川　岩視
	石橋　毅	山沢　勝夫
	稲田　四郎	横田　三男
	岩本　亮	（五十音順）
	臼井　正人	

交通安全標語

譲り合う
心が
家族を守る。

会員募集

この会は登渡神社の御神徳に感謝し、諸行事を助勢すると共に、会員相互の親睦を図り、御神徳を宣揚することを目的とする。

以上の主旨に賛同の方、男女を問わず入会を御待ちしています。詳しいことは知り合いの会員もしくは登渡神社社務所まで御気軽に御問い合わせ下さい。

TEL
FAX　〇四三―二四二―三四〇三

編集後記

御多忙中にも拘らず御寄稿頂き有難うございます。

平成十五年に登渡会結成二十周年の記念祝賀会が予定されています。長年に渡り神社の祭や年間行事に関わってきた会員の労をねぎらう意味で誠にけっこうなことであります。しかし登渡会も高齢化が進みこれから十年先のことも考えてみる時期であるとも言えます。登渡会の将来について皆で語り合いましょう。